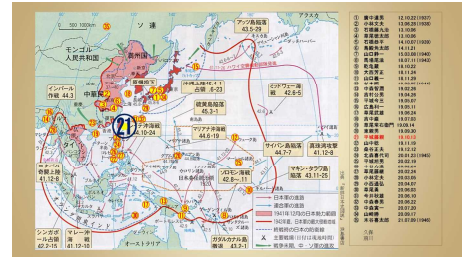


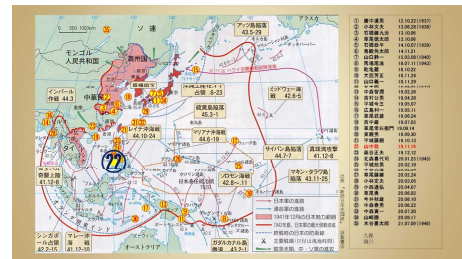
⑳

平城藤親さん。昭和13年11月、昭和19年10月13日、台湾東方で戦死。22才でした。出征された時は16才、志願兵でした。



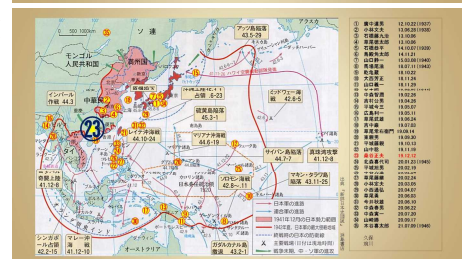
㉑

山中稔さん。昭和17年9月出征、昭和19年11月19日、フィリピンで戦死。16才でした。17年9月、稔さんが志願兵として出征された時、一代さんは11才でした。出征の前夜、稔さんは一代さんを外に呼び出し、「父さんや母さんの言うことを良く聞くように。特に母さんは病弱だから助けるように。」とここんと諭した後、キラキラ光る星空を眺めながら、心静かに『恩賜の煙草』を歌われたそうです。一代さんは、「兄のあの声、あの姿が、今も脳裏に焼き付いて離れません。」と書いておられます。



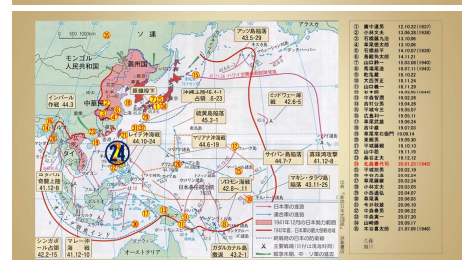
㉒

桑谷正夫さん。昭和19年12月12日、中国南方で戦死。



㉓

北森喜代司さん。昭和20年1月23日、フィリピン・ルソン島で戦死。25才でした。



㉔

平城旭男さん。昭和17年1月出征、昭和20年2月19日、ミクロネシア、マーシャル諸島で戦死。25才でした。



㉕

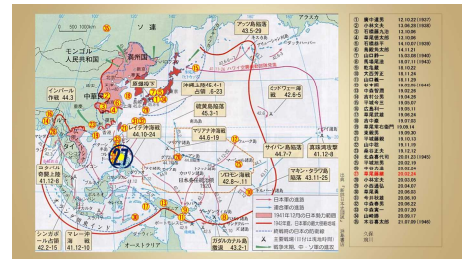
中谷力造さん。昭和19年2月出征、昭和20年2月24日、フィリピン・ルソン島で戦死。20才でした。19年2月、力造さんは役場勤めをやめ、志願兵として出征しました。その後1度の面会もなく、家族は心配の毎日でした。20年2月24日、ルソン島で玉砕。戦死公報が届いたのは、4ヶ月後の6



月でした。

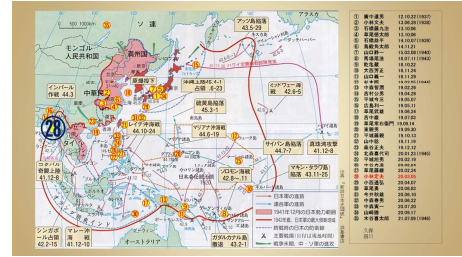
⑳

草尾藤継さん。昭和 20 年 2 月 24 日、フィリピン・ルソン島で戦死。



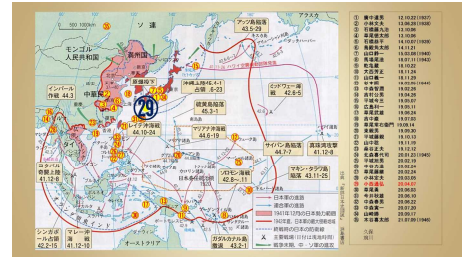
㉑

小林定夫さん。昭和 20 年 3 月 5 日、ビルマで戦死。27 才でした。



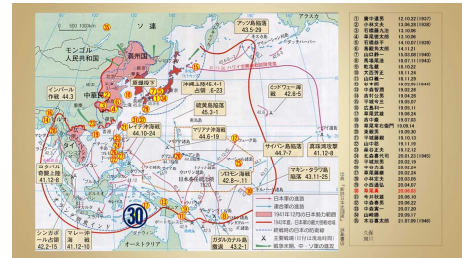
㉒

小西通弘さん。昭和 19 年 5 月出征、昭和 20 年 4 月 7 日、屋久島近海で戦死。24 才でした。戦艦大和の護衛艦に乗務中の戦死でした。



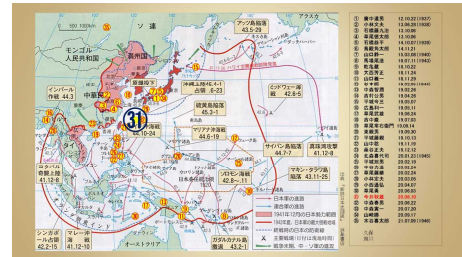
㉓

草尾勇さん。昭和 20 年 6 月 3 日、ニューギニアの近く、テイモール島で戦死。



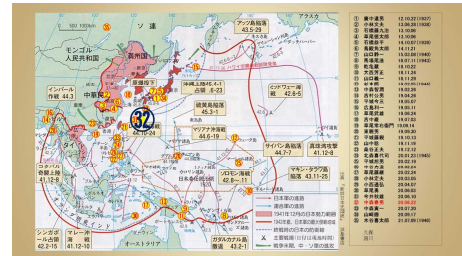
㉔

今井秋雄さん。昭和 20 年 6 月 10 日、沖縄で戦死。



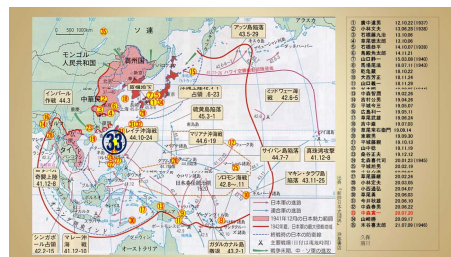
㉕

中森春男さん。昭和 17 年出征。昭和 20 年 6 月 22 日、沖縄で戦死。24 才でした。吐山の村にも白木に入った遺骨が次々に帰ってきて、村の葬式が行われました。「若い者が次々に亡くなり、村中が暗かった。やるせない思いだった。」と、春男さんの弟・健彦さんは当時を振り返っておられます。



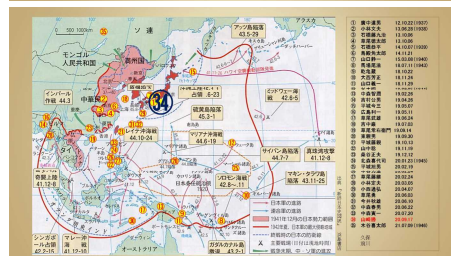
③③

中森寅一さん。昭和 20 年 7 月 20 日、フィリピン・ルソン島で戦死。31 才でした。



③④

山崎勝さん。昭和 20 年 9 月 17 日、和歌山の病院で死亡。



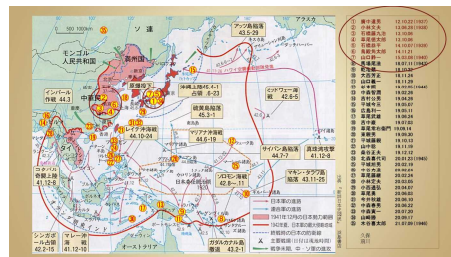
③⑤

木谷喜太郎さん。昭和 21 年 7 月 9 日、抑留されていたシベリアで死亡。

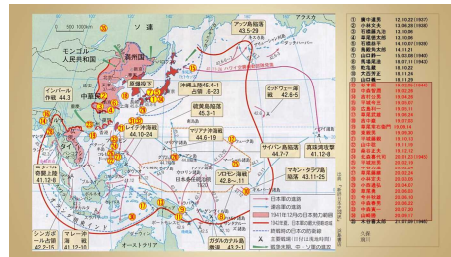


なお、前川さんと久保さんについては、詳しいことが分かりませんでした。

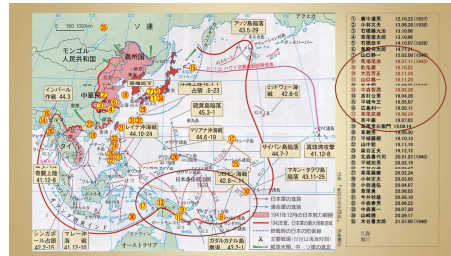
この地図と表から、次のようなことが分かりました。
昭和 15 年までの戦死者は、中国と日本の病院に限られています。それが、昭和 18 年より後はニューギニアやミャンマーまで広がっています。昭和 16 年 12 月 8 日にアメリカと戦争を始めてから戦場が一気に広がり、18 年ごろから激しい反撃に遭うようになっていったことが分かります。



昭和 19 年 2 月から 20 年 9 月までの間に、戦死者全体の 3 分の 2 の人が亡くなっています。

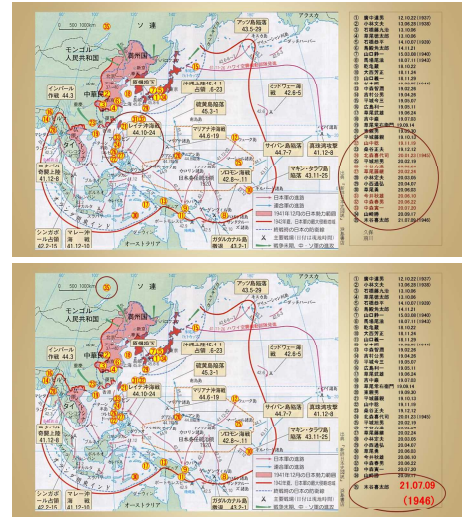


ニューギニア周辺で戦死した人は、昭和 18 年後半から昭和 19 年前半に固まっています。



フィリピンで戦死した人は、昭和19年の終わりから昭和20年前半に固まっています。昭和20年6月23日には沖縄を占領されたこととあわせて考えると、もうあとがなくなっている日本の状況が分かります。

さらに、戦争が終わって1年もたっているのに戦死した人がいることに、おどろきました。戦争が終わってから、捕虜としてシベリア地方に連れて行かれて、働かされたのだそうです。厳しい仕事と飢えや寒さのために、たくさんの人が亡くなったということです。



3 子どものころ戦争があった

～日中戦争・太平洋戦争中の子どもたち～



戦争中の学校について、10年入学の岡田文代さんは「校舎は古い建物で、床が落ちそうだった」、8年入学の中森初子さんは「雨が降ると雨漏りし、バケツを持って走り回った」、8年入学の中森健彦さんは「床にすき間があって、そこにほこりが落ちた。ストーブは家から薪を持ってきていたが、すき間が多くて暖かくなかった」と記録されています。

また、14年入学の下谷豊藤さんによれば、「体育館も講堂もなく、行事や儀式の時は間仕切りを外して2つの教室を1つにした。教室は4つしかなく複式学級だった」ということです。

当時の小学校は、吐山尋常高等小学校と言って、尋常科6年と高等科2年の8学年が4つの教室で勉強していました。16年に吐山国民学校と名前が変わり、尋常科は初等科と呼ばれるようになりました。17年入学の大東愛子さんは、「疎開してくる子が多く、クラスの人数が増えた」と記されています。

戦争と吐山

第2部
日中戦争・太平洋戦争中の子どもたち

2-1 戦争中の小学校

